
ラブカクテルス その16

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その16

【Nコード】

N9213C

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵はダシが決め手のカクテルをお作りしてお待ちしております。
ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は守り神でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺は宇宙人。

青い星、この地球を頂きにきた。

調べは済んでいる。

この星の奴らは、俺たちの星の文明からはかなり遅れているのは調査でわかっている。

しかも、奴らはうまそうだ。

この間の星を食い付くした俺らには、もうあまり蓄えもない。早く頭からガブツといきたいものだ。

きつと奴らの骨はコリコリしていて格別のはず。しかも肉は焼けば脂が滴り落ち、舌の上でトロけてしまうのは間違いなかった。

煮るのも良さそうだ。グツグツ音を立てて、いいダシが出るに違いない。

調味料をいっぱい入れてスパイシーなもの、きっと格別だろう。想像するだけでヨダレが止まらなかった。

俺はとりあえず偵察に出ることにした。

母船から一人乗りの戦闘機で飛び立ち、なるべく夜なのに灯りが多く光っている都市を目指した。

そういうところに、肥えた最高の獲物がいるはずだ。

最新の技術で母船から調査した時は、ある程度の文明指数と、この星の生物の頭脳指数、そして星自体の環境指数など、大まかなデータだったが、実際に眼で見るのは初めてだ。

何度違う星を見ても、やはりこの時は緊張する。

あくまでもデータはデータだからである。

俺は、空からかなりの灯りがある都市を見つけた。あそこが良さそうだ。

俺は急降下を開始した。

真夜中と言うこともあり、町はかなり静かだった。

やはり俺たちよりは劣る文明だったが、意外にも街並みはかなりのもので、細長く高い建物が幾つも建ち並んでいた。それは母船の滑走路に似ていた。

そして、色とりどりの光の看板があちこちに輝いている。

俺は戦闘機を周りから見えないように、透明モードにした。

そして、この星の言葉をメインコンピュータからアクセスして頭の中にインプットしてもらった。そしていよいよ、この星に降り立つことにした。

戦闘機の扉を開けると久しぶりに酸素が体に入ってきた。

俺たちの星にもかつては酸素があった。今は全て自分達で作り、機械に頼っているのが現状だが、やっぱり本物は最高だ。

植物から出来る香りがして格別だった。

俺の肺が悲鳴を挙げて喜んでるのがわかる。まるで黄色い声が聞こえてきそうだった。

さあ、そうしたら次は、やはり腹を満足させなくては。

俺はなるべく暗がりの道を歩いた。

すると、いたいた。あれはメスだな。

そいつは俺を目の前にすると、あまりの恐怖に体をこわばらせて固まったようだった。

俺は手でそいつを握りしめてマジマジと見た。

予想より随分と小さく、しかもデータとは違ってかなりの痩せっばちだった。

これじゃ、ダシをとってからしゃぶるくらいしかできないな。

俺は持つてきた最新技術の鍋を取り出した。

ボタンを幾つか押してしばらく待っていると、鍋から水が湧き、やがて沸騰した。

入れ頃だ。

俺はそいつを鍋の中へ放り込み、よく混ぜた。ついでに近くに生えていた木から葉っぱや花を入れるとなかなかいい香りがしてきた。

俺は流れるヨダレを必死に抑え、待った。なにせ初めチョコチョコ中パツパツ。赤子泣いても蓋とるな。これがおいしい料理の基本である。

そのうち葉っぱのいい香りがしてきた。

俺は携帯スプーンと携帯ナフキンを出して食事の支度を始めた。

やがて鍋は出来上がりのランプを灯した。

食べ頃だ。

まずはスープから味わってみた。

まあまあイケる。葉っぱのいいダシがでて上品な香りが鼻を抜ける。

次はいよいよメインである。

俺は頭から一気にガブツといった。

しかし、それは美味しいものでは決してなかった。いやまずかった。いくら噛んでも味がしてこないし、噛みきれなかった。

俺はガツカリして吐き出した。

なんてまずい生物なんだ。今まで食べた生き物の中で一番まずい。やはりオスがオススメか？

俺は広い通りに出て、次の獲物を探すことにした。

しばらく歩いた道の先に大きな広場があった。

俺は驚き反射的に身構えたのだった。

なんとそこには、今まで見てきた文明からは想像できない、巨大な人型戦闘ロボットが立っていた。

そいつは銃を構えていた。

しかし、動く気配はない。

俺はもう少し近づき、そいつの様子をうかがった。

なんだ、ハリボテか？と、次の瞬間、そいつの目が赤く光った。

俺は一步引いて再び身構えた。すると、そいつは俺に話掛けてきた。

警告する。この星から立ち去れ。さもなくばお前らの母船モロとも粉々にしてやる。

俺はさらに驚いた。

なぜ母船のことまで知っているんだ。

そいつは続けた。

分からないようだな。

そして、それならばと、銃を光らせ始めた。

俺は慌てて、戦闘機まで戻って母船へと引き上げた。

まずい、この星は予想外の文明を持っている。早いところ母船に知らせないと。

俺はまずかったあの味が舌に残っているまま、それほど苦労して奪っても、どうせ美味しい生物ではないしと思ったのだった。

街並みに朝日が差してきた。

静かだった夜とは違い、人々がどこからともなくこの街にやってきた。

駅前の広場には、来月から公開予定の映画、宇宙神　コスモクロス
の宣伝のために立てられた巨大な立体ロボットの看板が、同じ台詞
を繰り返し映画のピーアールを行っていた。

その足元では、派手な服を着た女性が、通りがかりの人にティッシ
ュを渡してカン高い声で、自分達の店を宣伝していた。

お越しくださいますっ、ご主人様。

そして、裏通りでは、ちよつとした事件が発見されていた。

誰だっ！うちのフィギュアを勝手に持ち出したのはっ。

あゝあ、べとべとじゃないか。可哀想な萌ちゃん。でもこんな姿も
結構イカしてるかも。萌えっっ！

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ちしております。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213c/>

ラブカクテルス その16

2011年1月28日10時19分発行